

両生類

兵庫県には、外来種を除くと、サンショウウオ目 6 種、カエル目 13 種の合計 19 種が分布しています。全県的に最も普通にみられる種として、イモリ、ニホンアマガエル、トノサマガエル、ヌマガエルが良く知られており、局所的に分布する種では、アベサンショウウオ(*) (豊岡市) やハコネサンショウウオ (但馬および西播磨地域)、ダルマガエル (瀬戸内海側) があげられます。なかでも、アベサンショウウオは、本県以外に京都、福井の一部だけに分布し、生息地は極めて限定的です。

多くの種は全県に分布しますが、オオサンショウウオ、アベサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、ナガレタゴガエル、モリアオガエルは淡路島での記録がありません。生息地は、主な 3 つのタイプに区分できます。山地源流部の河川や湿地には、ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、アベサンショウウオ、カスミサンショウウオ (高地型)、タゴガエル、ナガレタゴガエルが、上流から中流の河川にはオオサンショウウオとカジカガエルが、水田などの低湿地にはその他の種類が生息しており、食物網の中で重要な生態学的役割を果たしています。

外来種では、ウシガエルが県内の水田、池沼や河川に広く分布しており、小型の水生動物を捕食するため、在来種にとって負の影響を及ぼしています。また、最近では外国産の両生類を媒介とするカエルツボカビ症(*)による影響も懸念されています。

両生類は、地理的に遺伝分化が生じやすいことから、亜種(*)以下のグループに細分して検討される場合もあります。本県でも、ニホンヒキガエル (アズマヒキガエル)、カスミサンショウウオ (高地型)、ダルマガエルやカジカガエルでは、亜種レベルの相違や異なる遺伝型や形態をもつ個体群が、地理的な境界をもって分布しています。県内の両生類相を考えるうえでは、種を単位とすることに加えて、「地域個体群」をベースとした視点も必要といえます。

兵庫県版レッドデータブック 2003 では、本県に生息する 19 種のうち、実に 16 種が掲載され、絶滅が危惧されています。

このうち、アベサンショウウオは、生息地が極めて限定的であることから、日本で最も絶滅が危惧される両生類として、種の保存法および環境省レッドデータブック絶滅危惧 類 (CR)、兵庫県 A ランクに指定されています。県内では、ダルマガエルが同じく A ランクに指定されており、両種の生息地周辺においては、保全対策に加えて、軽微

な土地改変であっても、事前の生息実態調査を実施することが望ましいといえます。

生息場所別にみた県内における両生類の主な減少要因は以下のとおりです。山地源流域では、砂防ダムの設置や林道開発、植林等による二次林の消失が、河川では、ダムや堰堤による分断化や土砂供給の変化が、水田や低湿地では、生息地自体の消失をはじめ、圃場整備、農薬等の散布、外来種の侵入、隣接する森林の消失、生息地間の連続性の分断化等が関係しています。このように上記に関連する公共事業では、十分な配慮が必要といえます。

多くの両生類は、移動性に乏しいことに加えて、繁殖場所と採餌場所が異なること、繁殖場所として小規模で不安定な水域（山裾の水たまりや氾濫原など）を利用することから、単独の生息場所を保全するだけでは絶滅のリスクを軽減できません。そのため、両生類の保全のためには、広域的な視点から、複数の繁殖場所と生息場所間の生態系ネットワークを考慮し、優れた生息場所の総量を確保することが重要です。